

1 はじめに

本校は、児童数113名の小さな学校である。異学年のつながりが強く、高学年が低学年を優しくリードするという雰囲気が十分にできあがっている。低学年のうちはそのような高学年の姿に親しみやあこがれを抱き、高学年になれば自分がしてもらったようにするのが当然と考えることができる児童が多い。そのような雰囲気を生かした異年齢集団による交流について、いくつかの実践を報告する。なお、以下はいずれも令和元年度の実践である。

2 資料

(1) 縦割り班活動

ア 毎月2回のあいさつ運動

「心のこもった気持ちのよいあいさつができるようになろう。」という目標のもと、月2回、計画・JRC委員会や縦割り班が正門に立って、あいさつ運動を行った。地域の人々やPTAの方々も一緒に活動してくださり、さわやかなあいさつが飛び交った。

イ 縦割り班ランチ

一年を通して2回、ランチルームでの縦割り班での会食を行った。異なる学年の児童と楽しく給食を食べて親睦を深め、最後は全員で協力して片付けまで行った。

ウ ドッジボール大会

高学年は低学年を当てることができないが、低学年は高学年を当てることできるというルールを設定し、高学年の児童が低学年の児童を守ったり誘導したりしながら、楽しく活動することができた。

エ 8の字とび

なわとび週間には、週に1・2回、縦割り班毎に5分間で何回跳べるかを競った。高学年が低学年に跳び方のコツを教え、みんなでかけ声をかけてリズムをとったり、失敗しても「ドンマイ!」と励ましたりしながら楽しく活動した。回数の発表では、毎回どの班も少しずつ記録を伸ばし、歓喜の声をあげて喜び合う姿が見られた。

オ 校内ボランティア活動

年に2回、縦割り班で特別教室の清掃を行った。高学年が清掃の分担を決めたり、清掃の仕方を教えたりして、リーダーシップを発揮しながら活動した。

3 成果と課題

- ・高学年の児童を中心に様々な行事の企画・運営を行い、主体的に活動することができた。
- ・異年齢集団による交流だからこそ、学級での様子とは違った一面を見せたり、活躍したりする児童もいた。自分の良さを発見・再認識したり、低学年に優しくしたりして、望ましい人間関係を築くことができた。
- ・児童はどの活動も楽しんでいるが、「毎年行っているからやる。」という意識があることも事実である。児童の自主性や工夫を生かした活動を今後さらに展開していきたい。